

サッカーの技術・戦術構造に関する考察

佐藤 亮平¹ 竹田 唯史² 近藤 雄一郎³

A study of structure of techniques and tactics of football

Ryohei Sato¹, Tadashi Takeda², Yuichiro Kondo³

Abstract

The purpose of this study is to propose the structure of techniques and tactics of football. The method is mentioned as below: The theory of Japanese Football Association (2007), Kaneko Kenichi (2010) and Ito Takeshi (2005) studies were investigated as previous studies. Investigational points were game aspects and the structure of techniques and tactics of football. In these previous theories, game aspects were not constituted of "Loose ball" aspect. Techniques which were used in each tactics were not clarified. In addition, qualitative developments of techniques were not described. Based on these investigations, the own theory of game aspects and the structure of techniques and tactics were proposed. Results described as below; the court of football was divided to three area: Important Area, Side Area, Break Area. Game aspects of football were proposed to add to "Loose ball" aspect. The structure of techniques and tactics which consist of Important Area was proposed.

Key words: football, structure of techniques and tactics, game aspect, teaching method.

緒言

今日、日本においてサッカーは広く普及し、競技人口も増やしている。また、多くの日本人選手が海外リーグで活躍し、多くの子どもたちに夢をあたえている。しかし、効果的な指導を実践し成果を挙げている指導者がいる一方で、学校現場やサッカー少年団の指導現場においてはサッカー未経験者で何を指導して良いかわからず、苦勞する指導者の姿が実際に見受けられる。また、少しでも良い指導ができるように指導者自身がサッカーの指導方法について学ぼうとしても、学習する際の手助けとなる指導書については、各個別技術や戦術については詳しく説明しているが、選手の技能やチームの特性に応じて、何をどのような順序で指導すべきかを明確にしてい

る指導書は多いとはいえない^{注1)}。

井芹 (1991, 2003), 進藤 (1988, 2003), 竹田 (2010) らは、指導対象となるスポーツの歴史的発展を考察し、そのスポーツ独自の面白さであり技術を発展させる要因となる「技術的特質」^{注2)}を明らかにしたうえで、そのスポーツの技術・戦術を構造化して捉え、高村 (1987) の教授学理論を取り入れ、学習者の技能レベルや技術習得の発展段階を考慮した指導理論を構成している。さらに、指導過程を客観的に示し、誰もが優れた授業を再現可能な「教授プログラム」を作成し、実験授業によって検証するという研究方法を用いて、水泳、テニス、とび箱、バレーボールおよびスキー等の指導理論に関する研究を進めている。筆者もこの研究方法論に基づき、サッカーの歴史的発展を考察し、サッカーの面白さである「技術的特質」を「主に脚でボールを操作し、攻撃側はチー

1. 北翔大学大学院生涯学習学研究科
〒069-8511 江別市文京台23番地
2. 北翔大学生涯スポーツ学部
〒069-8511 江別市文京台23番地
3. 北海道大学大学院教育学院
〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

1. Graduate School of Lifelong Learning, Hokusho University
23, Bunkyo-dai, Ebetsu, 069-8511
2. School of Lifelong Sport, Hokusho University
23, Bunkyo-dai, Ebetsu, 069-8511
3. Graduate School of Education, Hokkaido University
Kita-8, Nishi-5, Kitaku, Sapporo, 060-0808

著者連絡先 佐藤 亮平
sr8310104@wm.hokusho-u.ac.jp

ムとして『重要空間』にボールを運びそこからのシュートを目指す。守備側はそれを防ぐ」と規定した（佐藤，2010）。学習者の技能レベルや技術習得の発展段階に合致した指導理論を構築するためには，客観的に存在するサッカーの技術・戦術構造を明らかにする必要がある。

また，球技において一般的に用いられる「戦略」「戦術」「作戦」の用語についてみると，吉田（1991）は，長谷川（1990），瀧井（1990），シュティーラー（1980）らの「戦略」「戦術」「作戦」の用語について検討し，「戦略」を「個々のゲームに限定されない，長時間あるいは長期間にわたるスポーツ活動全体を見通した計画」と規定した（吉田，1991，p.49）。「戦術」を「ゲームの中で，それぞれのプレーの局面を経済的，合目的にプレーするために，競技実際から経験的に得られ一般化された理論」とした（吉田，1991，p.49）。「作戦」については「そのときどきのゲームにおいて，個人的・集団的戦術を組み合わせ，戦略の実現に向けてどのように戦うかという方策であり，『戦術』を『戦略』へと不可分に結びつける」（吉田，1991，p.49）と規定した。また，デーブラー（1985）は，「戦術」を細分化し「チーム戦術（戦術構想）はそれぞれのプレーヤーの個人的能力やグループ戦術行動を考慮しなければならない」（デーブラー，1985，p.267）と述べ，「チーム戦術」「グループ戦術」「個人的戦術」の階層性と相互関連性を指摘している。

そこで本研究の目的は，サッカーにおける技術・戦術構造について，階層性と相互関連性があるものとして捉え，筆者が考えるサッカーの技術・戦術構造を提起することにある。

研究方法

研究方法は，先行研究における技術・戦術構造を検討し，それらの問題点・改善点を指摘する。検討対象は，日本サッカー最大の組織であり，公認指導者制度により多くの指導者に影響を与えている日本サッカー協会の理論（日本サッカー協会，2007）。サッカー先進国の一つであり，世界最高レベルのクラブチームが所属する国内リーグが存在するスペインにおける育成方法を紹介し，日本の育成方法の課題について考察している金子の理論（金子，2010）。サッカー初心者を対象とし，独自の視点から技術・戦術を相互関連の中で捉え，他の理論では見られない技術・戦術構造を提起している伊藤の理論（伊藤，2005）とする。先行研究を検討する視点は①サッカーの「ゲームにおける局面」をどのように捉えているか，サッカーの②「技術・戦術の構造」をどのように捉えているかの2点とし，それぞれの先行研究における評価点と問題点を明らかにする。サッカーでは，「ゲームにおける局面」に応じた技術・戦術を用いることが必要とされる。そのため，サッカーの技術・戦術構造を明らかにするためには，「ゲームにおける局面」の検討が不可欠であるといえる。これらの検討に基づき筆者独自の技術・

戦術構造を提起する。

結 果

1. 先行研究におけるサッカーの技術・戦術構造についての検討

1) 日本サッカー協会の理論

(1) ゲームにおける局面についての概要と評価

サッカーのゲームにおける局面を「①ボールを支配しているとき（攻撃），②ボールを失ったとき（攻撃から守備への切り替え），③相手がボールを支配しているとき（守備），④ボールを奪ったとき（守備から攻撃への切り替え）」の4つに分類し（図1），各局面におけるプレーの目的を挙げている（日本サッカー協会，2007，p.14，pp.35-36）（図2）。

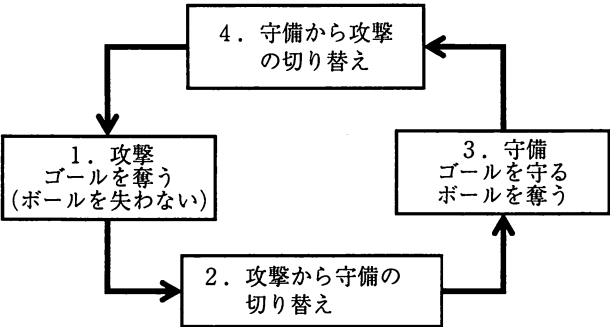


図1 日本サッカー協会のゲームにおける局面（日本サッカー協会，2007，p.14に基づき筆者が加筆・作成）

1. 攻撃（ボールを支配しているとき）
・ゴールを決める ・チャンスをつくる組立て
2. 攻撃から守備への切り替え（ボールを失ったとき）
・プレーの切り替え ・奪い返す ・遅らせる
3. 守備（相手がボールを支配しているとき）
・ゴールを防ぐ ・ボールを奪い返す
・相手ボール保持の妨害
4. 守備から攻撃への切り替え（ボールを奪ったとき）
・プレーの切り替え ・ゴールを意識 ・スピード

図2 各局面におけるプレーの目的（日本サッカー協会，2007，p.36に基づき筆者が加筆・作成）

サッカーのゲームにおける局面を「攻撃」「守備」「攻撃から守備」「守備から攻撃」の4つ局面に分類し，各局面におけるプレーの目的を挙げることにより，サッカーの局面を明確にし，選手の現在置かれている状況について理解し，各局面におけるプレーの目的に合致したプレーをすることが可能となる。

しかし，この4つの分類のみではサッカーの「ゲームにおける局面」を明確に捉えることができないため，技術・戦術構造を明らかにすることは困難である。サッカーやバスケットボール，ハンドボールといったゴール型の球技においては，どちらのチームにも支配されない

「ルース・ボール」という局面が存在する。この「ルース・ボール」という局面を明確に位置付けることにより、「攻撃」「攻撃から守備」「守備」「守備から攻撃」の局面間の移行にルース・ボールの保持・失敗という要因が関わり、ルース・ボールと各局面の移行の関係が明確になる。したがって、「ルース・ボール」の局面を明確に位置づける必要がある。「ルース・ボール」の定義等については後述する。

(2) 技術・戦術構造の概要と評価

日本サッカー協会は個別技術に関し、「攻撃に関するテクニック」「守備に関するテクニック」として、それぞれの内容を挙げ（日本サッカー協会、2007, pp.11-12）、技術と戦術を結ぶ重要な要素として4点を挙げている（日本サッカー協会、2007, p.10）（図3）。

攻撃に関するテクニック	守備に関するテクニック
・ボールフィーリング ・ドリブル ・フェイント ・スクリーン&ターン ・ボールコントロール ・ラン・ウィズ・ザ・ボール ・キック ・シュート ・ヘディング ・パス	・インターセプト ・ボディコンタクト ・スタンディングタックル ・スライディングタックル
技術と戦術を結ぶ重要な要素	
①ボールに寄る ②パスしたら動く/スペースをつくる、使う、サポートを含める ③周りを見る ④ボールを奪いに行く	

図3 日本サッカー協会における個別技術
（日本サッカー協会、2007, pp.10-13に基づき筆者が加筆・作成）

攻撃の戦術においては「個人戦術」「グループ戦術」に分類し、「個人戦術」のボール保持時には「観る」「判断」を通して「シュート」「ドリブル」「パス」を位置づけ、ボールを保持していない場合には「観る」「判断」を通じて「動き」を位置づけている。「グループ戦術」に関しては「突破のコンビネーション」として「ドリブル突破（サポートの牽制を利用して）」「スルーパス」「壁パス」「クロスオーバー」「オーバーラップ」「第三の動き」を位置づけている（日本サッカー協会、2007, pp.16-17）。

守備の戦術についても「個人戦術」「グループ戦術」に分類し、「個人戦術」の「ボールを持った相手に対して」では、「相手とゴールを結んだライン上を意識する」「相手とボールを同一視できる身体の向きを確保」「チャレンジ可能かつ、裏を取られない」を位置づけ、「ボールを持っていない相手に対して」では「正しいポジショニング」「アプローチ」「チャレンジの優先順位」を位置づけている。「グループ戦術」に関しては、「チャレンジ&カバー」を挙げ「第1ディフェンダー（ボールを持っている相手をマークしている）」が、ボールを奪いに行く」「第2ディフェンダー（ボールを持っていない相手をマーク）は、カバーリングを考え、ボール保持者の様子や距離・

角度に注意してポジションをとる」を位置づけている（日本サッカー協会、2007, pp.22-23）。

戦術に関しては、「チーム戦術、グループ戦術、個人戦術はそれぞれ明確に区別されるものではありません。個人戦術を土台にし、そこにチームメイトが関わることによって、グループ、チームへと戦術が生まれてきます」と述べ（日本サッカー協会、2007, p.15）、これらが相互関連のあるものと捉えている点は評価できる。これにより、どんなに優れている「チーム戦術」であってもそれを支える「グループ戦術」や「個人戦術」がなければ機能しないことが理解できる。さらに個別技術と戦術を結ぶ重要な要素を挙げたことにより、試合における各戦術で個別技術を発揮するための要因を明らかにすることができる。

しかしながら、「攻撃の戦術」「守備の戦術」において位置づけている戦術が、現存する戦術を提示しているに過ぎず、各戦術に対応する個別技術が明確になっておらず、技術・戦術の構造化が不十分といえる。デーブラー（1985）は「技術のレベルは戦術的措置の選択と作用に十分に影響をおよぼしている」とし、各戦術と個別技術は相互関連していると指摘している（デーブラー、1985, p.235）。そのため、戦術にはその戦術に対応した個別技術があり、各戦術に対応した個別技術を位置づける必要がある。

2) 金子憲一の理論

(1) ゲームにおける局面の概要と評価

ゲームにおける局面については、日本サッカー協会の理論と同様に「攻撃」「守備」「攻撃から守備への切り替え」「守備から攻撃への切り替え」の4つの局面に分類している（金子、2010, p.5）。「攻撃」の局面においては「進展」「ボールの保持」「フィニッシュ」の3点、「守備」の局面については「ボールの奪取」「ゴールを守る」「相手による攻撃の進展を阻止」の3点を挙げ、「攻撃」「守備」の目的を明確に示している（金子、2010, p.5）。さらに、「現代のサッカーは、この4つの局面を切り離して考えることはできない。攻撃している時に守備のことを考え、守備のときに攻撃のことを考えなくてはならない。（中略）サッカーにおいてはほとんどがフィニッシュまで行けずに、攻守の切り替えが発生する。それだけ、攻守の切り替えというものは重要性を持っている」と述べ、これら4つの局面の関係性を示している（金子、2010, p.5）。

「攻撃」「守備」の局面における目的を、3点に絞り明確に示している点は、選手や指導者がこの局面における目的を理解することができる。しかし、サッカーのゲームにおける局面の分類については日本サッカー協会の捉え方と同様であり、「ルース・ボール」の局面を明確に位置づける必要がある。

(2) 技術・戦術構造の概要と評価

サッカーの「テクニック」「戦術」「システム」の関係

について、「サッカーにおいてテクニックはテクニックだけで独立して存在していない。あくまで状況を把握して、システムに応じて何をするかの決断をし、そしてその『実行』を指す。ここに戦術的要素が絡んでくる」とし(金子, 2010, p.5), 「テクニック」「戦術」「システム」の関係性について適切に捉えている。さらに金子は, スペインサッカー界における「戦術」の定義について「相手を前にして何をするのかの判断と実行」としている(金子, 2010, p.5)。「戦略」の規定については「戦術を実行するための, あらかじめ計画された動き」とし, 「戦略」と「戦術」の関係性について捉えている。

金子(2010)の示した「サッカーのプレー時に関するテクニックの体系図」(図4)についてみると, 図中左側の「ボールを受ける」「操作する」「止める」という3つ動作を「トラップ」とし, サッカーの技術の「はじめの動作」としている。また, 図中右側の「パス」「シュート」をサッカーのプレーの「最後のアクション」と位置付けている。「ドリブル」については「トラップ」から「パス」「シュート」へと「つなげるためのアクション」として位置づけている(金子, 2010, pp.5-6)。

金子(2010)は「すべてのテクニックは, 一番右側のパスとシュートにつながる。(中略)サッカーで一番の

重要度を占めているのはこの2つ(パス, シュート)である」とし, その理由を「なぜならこの動作がなければ, 目的(得点)にたどり着くことはできないからである。いかにコントロールができてフェイントができて, パスとシュートがなければ, ゴールもできないし, 味方につなぐこともできない。逆にコントロールやドリブルがなくても, パス, シュートがあればゴールは決まり, 味方にボールをつなぐことは可能である」とし, 体系図(図4)の矢印が最終的に「パス」「シュート」につながっているとしている(金子, 2010, p.6)。

以上のように金子(2010)は「戦略」「戦術」「システム」「テクニック」を階層性, 相互関連性の中で捉え(金子, 2010, p.5), 各技術の相互関連を明確にし, 技術の体系図として示している。これにより, サッカーにおける技術がどのような構造になっているかを客観的に捉えることができる。さらに, 日本サッカー協会が最終的なプレーの選択肢に「ドリブル」を位置づけているのに対し, 金子(2010)は最終的なプレーを「シュート」「パス」としている。

しかし, 金子の理論においては技術体系のみの紹介のため, 技術体系と各戦術との関連性が不明確であるといえる。

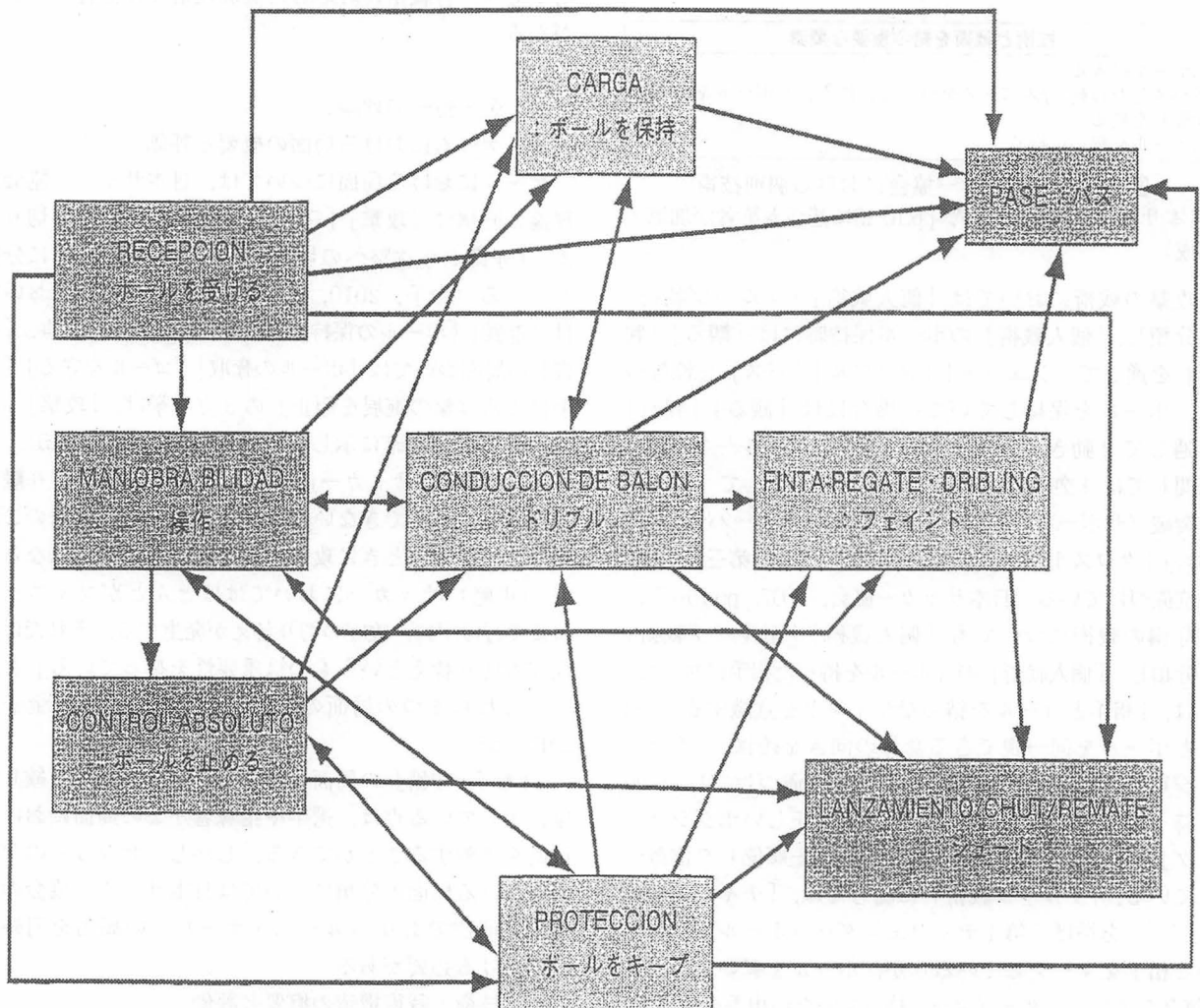


図4 サッカーのプレー時に関するテクニックの体系図(金子, 2010, p.6)

4) 伊藤烈の理論

(1) サッカーのゲームにおける局面の概要と評価

伊藤 (2005) は、サッカーのゲーム展開を「攻撃1」「攻撃2」「防御1」「防御2」の4局面に分類している。「攻撃1」とは「ゲームにおいて、フィールド中央付近でボールを保持している状態」、「攻撃2」とは「相手ペナルティーエリア付近でボールを保持している状態」、「防御1」とは「フィールド中央付近でボールを保持されている状態」、「防御2」とは「自軍ペナルティーエリア付近で相手プレーヤーにボールを保持されている状態」としている。そして、各局面における集団戦術と個別技術を位置づけている (図5) (伊藤, 2005, p.34)。

サッカーの各局面をボールがフィールドのどこにあるかとの関係から「攻撃」「防御」を2つに分類し、各局面においての具体的な個別技術・集団戦術を挙げている点は評価できる。

しかし、各局面間の移行は示しているが、「攻撃から守備」「守備から攻撃」の局面を位置付けていない点は改善点である。また、日本サッカー協会の理論、金子憲一の理論と同様に「ルース・ボール」の局面を位置づけ

る必要がある。

(2) 技術・戦術構造の概要と評価

サッカーの技術・戦術構造については、「フリースペース」の概念を中核に据え、サッカーの「質的发展段階」を「個人の力による攻撃と防御」「フリーな選手を活用した攻撃とその防御」「フリースペースを活用した攻撃とその防御」「フリースペースを創造する攻撃とその防御」の4段階に分類している (図6)。そして、それぞれの「質的发展段階」に対応する「攻撃」と「防御」の「集団戦術」と「個別技術」を位置づけ、それらを相互関連の中で捉えている (伊藤, 2005, pp.35-40)。攻撃戦術では、各发展阶段に対応させ、ドリブル突破、対人パス、スルーパス、ポジションチェンジ戦術を位置づけている。これらの戦術に対応するために守備戦術もワンサイドカット・ディレイ、マンツーマンディフェンス、カバーリング、ゾーンディフェンスを位置づけている。そして、戦術を支える個別技術として攻撃は、キック、ドリブル、トラップ、ヘディング、ポジショニング、フリーランの6個を挙げ、守備は、プレッシング、チャージング、タックル、インターセプト、パスカット、クリ

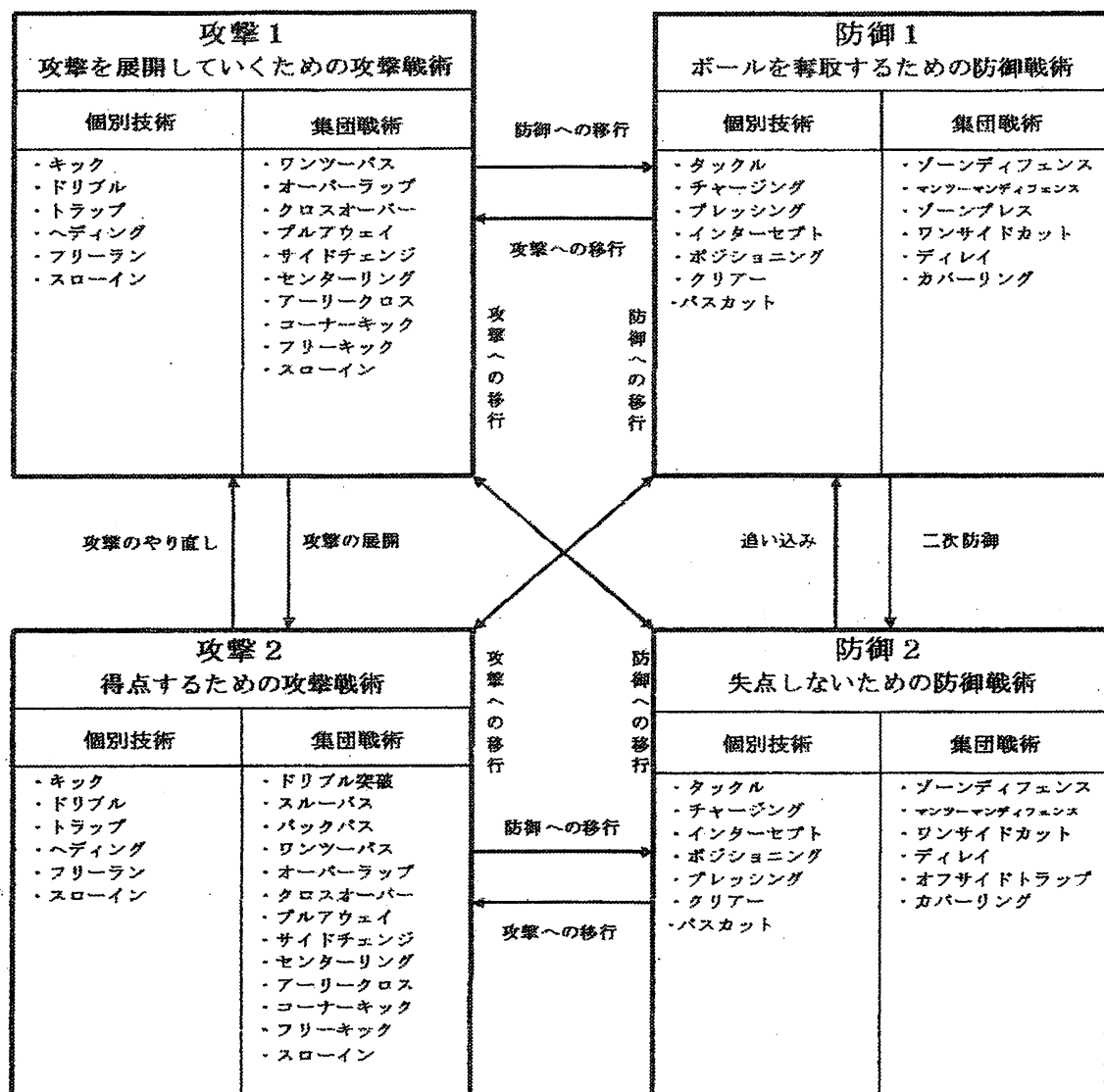


図5 サッカーのゲームにおける局面 (伊藤, 2005, p.33)

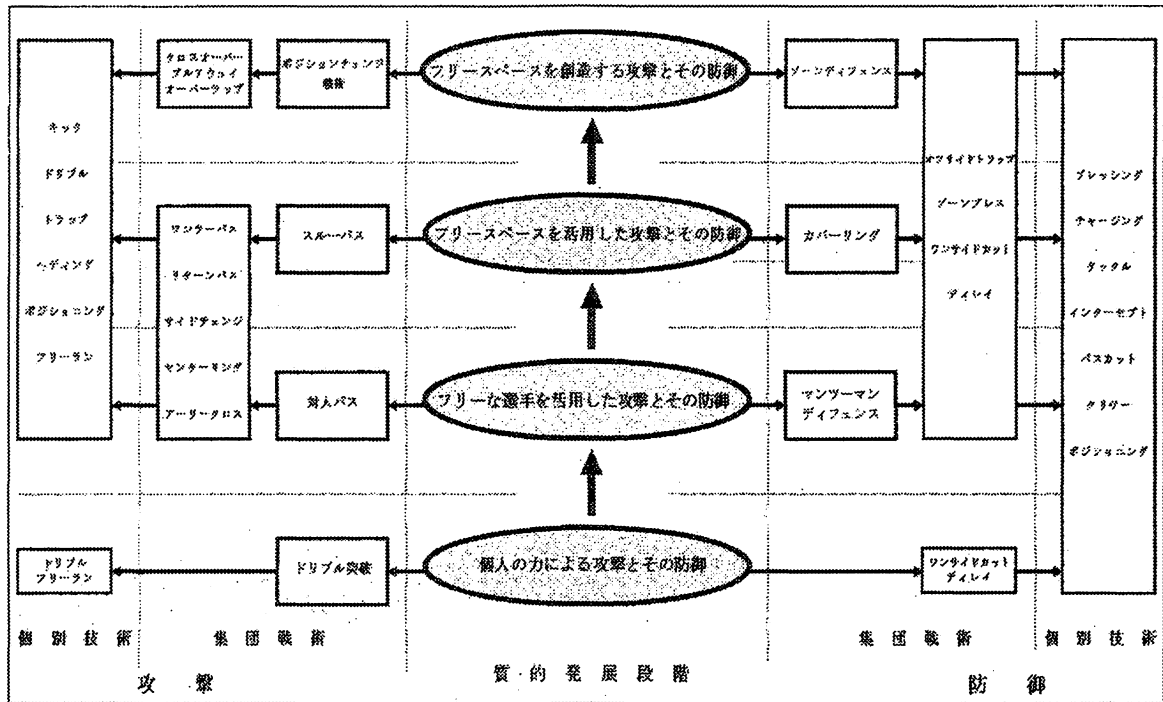


図6 伊藤によるサッカーの技術・戦術構造 (伊藤, 2005, p.35)

ア, ポジショニングの7個を挙げている (伊藤, 2005, pp. 35-39)。

サッカーにおける技術・戦術構造を「フリースペース」の概念を中心として「質的发展段階」を整理し、4段階に階層化し捉えている点は評価できる。このように「質的发展段階」を示すことにより技術・戦術の階層性、順序性を明確にでき、次の段階に向けてどのように発展していくか明確にすることができる。また、この「質的发展段階」に「攻撃」「防御」を対応させ、それぞれの「集団戦術」「個別技術」を位置づけ、これらが相互関連の中で発展していることを示している点も評価できる。

しかし、各戦術に対応する個別技術の質的な発展を示していない点は改善点である。例えば、「パス」という個別技術についてみると、ワンツースパス戦術においては受け手とタイミングを合わせたショートパスが求められる。しかし、サイドチェンジ戦術においては、ロングキックによる、遠くに運ぶというパスが求められる。このように、各戦術に対応した同じパスという個別技術においても質的な発展が求められる。そのため、各戦術に対応する個別技術の質的发展を明確にする必要がある。

また、「フリースペース」の概念を中心として構造化しているが、サッカーのゲームにおいてフリースペースが発生する場所が重要となる。例えば、「フリースペース」でもハーフウェーライン付近で発生するものとゴール前で発生するものでは、その重要度が異なるからである。このようなことから、サッカーのフィールドの中で重要となる「場所」を明確にし、その「場所」を中心とした技術・戦術を構造化すべきと考える。

2. 筆者の考える技術・戦術構造について

先行研究を検討した結果、サッカーの技術・戦術構造

を提起するためには、フィールドの分類とゲームにおける局面について新たに考察することが必要である。したがって、まず、フィールドの分類、ゲームにおける局面について検討し、これらを踏まえて、筆者の考えるサッカーの技術・戦術構造について提起する。

1) サッカーのフィールドの分類

先述した先行研究の検討により、筆者の考えるサッカーのフィールドの分類と各エリアの持つ特性について述べる。筆者はサッカーのフィールドを「重要空間」「サイドエリア」「ブレイクエリア」の3つに分類した (図7)。「重要空間」とは学校体育研究同志会の球技分科会において、「最もシュートが入れやすい場所 (シュートしやすい領域)」と規定された概念である (荒木, 2004, p.227)。サッカーにおける「重要空間」は、ペナルティーエリアが該当すると考える。その理由は、2006年のJ1リーグにおいてペナルティーエリア内からのシュートが、全体のゴールの80パーセントを占めており (Jリーグ, 2006) ペナルティーエリア内からのシュートは、得点に結びつ

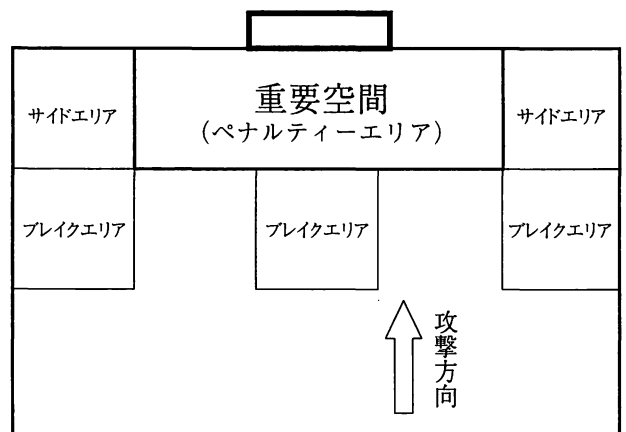


図7 サッカーのフィールドの分類

く可能性が非常に高いと考えるからである。また、ペナルティーエリア内では守備者側が反則を犯すと攻撃側にペナルティーキックが与えられるため、守備者側は反則を犯さぬよう警戒する必要がある、ペナルティーエリアは通常のエリアよりもディフェンスがしにくく、攻撃側にとって優位なエリアといえ、得点するための「重要空間」として設定した。

「重要空間」を設定することにより、攻撃はどこにボールを運ばよいかを理解でき、逆に守備者側は、どこにボールを入れたら失点の可能性が高まるのかということを理解できる。サッカーはゴールを奪う―守ることを目的としているが、ゴールを奪うための場所、奪われやすい場所を明確にすることにより、選手自身のプレーの目的が明確になり、プレーの方向づけが可能となる。例えば、攻撃ならば、いかにして「重要空間」からシュートするか、守備ならば、いかに「重要空間」にボールを入れさせないか等である。

ペナルティーエリアの外側を「サイドエリア」とした。この「サイドエリア」を位置づけた理由は、「サイドエリア」にボールを運ぶことにより、守備の選手が「サイドエリア」に位置し、守備の選手間の距離が広がる。これにより、攻撃側には中央付近で利用できるスペースが拡大する。また、「サイドエリア」深くに侵入することによりオフサイドラインが、最終守備者の位置するラインからボールの位置するラインへと移行し、攻撃側にとってはオフサイドとなりづらいエリアでもある。そのため、攻撃側にとって有効なエリアと考える。また、越山（2004）も得点を挙げるためには、組織的に固められたゴール前よりも、「守備陣の頭を越すような高いボール（センターリング）を送るほうが効果的で、且つ必要性も増してきた」とし、「サイドエリア」からの攻撃の重要性について述べている（越山，2004，p.146）。

ペナルティーエリアの中央と「サイドエリア」の後方部分を「ブレイクエリア」と設定した。このエリア^{注3)}は攻撃の起点となるエリアと捉える。「重要空間」に直接ボールを運べない場合には、このエリアにボールを運び攻撃を展開するエリアである。また、「重要空間」にボールを運べたとしても相手の守備が堅く崩せない場合、攻撃をやり直すエリアでもある。これと類似したものとして「バイタルエリア」というものがある。「バイタルエリア」とは「ペナルティーアーク付近のエリア。ラストパスの起点となりうるエリアを指すことも多い。もともとは非常に重要なエリアという意味」と規定されている（日本サッカー協会，2007，p.99）。しかし、「バイタルエリア」は場所を明確に規定されておらず、流動的なものとして捉えているが、筆者の設定した「ブレイクエリア」はペナルティーエリア中央と両「サイドエリア」後方として位置づける。

以上のエリアの設定に関しては、2005年J1に所属していたチームの第17節までの各チームの各エリアでのパスを受けた回数のデータを集計し、パスを受けた数の平

均値も参考にして設定した（図8，Jリーグ，2005）。

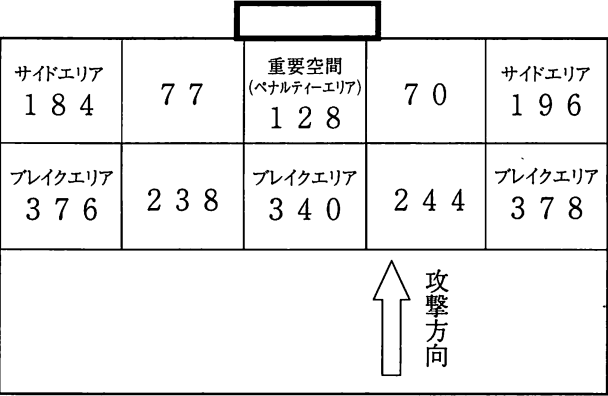


図8 2005年J1リーグ17節までにおける試合中にパスを受けた平均本数のエリア分布（Jリーグ，2005，データに基づき筆者が作成）

また、図9において各エリアにおけるプレーの優先順位の内容を示した。この優先順位は各エリアにおける攻防のプレー選択をする際の指標となるものとして構成した。「重要空間」の攻撃においては、「シュートをする」ことを第一に考え、守備においては「ボールを奪う（ファウルをしない）」を第一に考える。「ブレイクエリア」の攻撃については、「シュートをする（コースがあれば）」ことについて考えるが、無理な場合は「重要空間へ侵入する（突破、パスを含む）」、守備については「ボールを奪う（ファウルをしない）」ことが基本であるが、このエリアの独自の特性として「他のエリアへ移行させない」ことが挙げられる。「サイドエリア」の攻撃については、「重要空間へ侵入（突破）」することを考え、次の選択肢として「重要空間へセンターリングする」ことが挙げられる。「サイドエリア」の守備については「ブレイクエリア」同様に「ボールを奪う（ファウルをしない）」ことが基本であるが、このエリアの独自の特性として「重要空間に侵入させない（突破、センターリングを含む）」ことが挙げられる。このように3つのエリアの特性を基に、プレーの優先順位を設定した。これによりプレーヤーや指導者は各エリアにおいてこういったプレーを行えばよいかを理解できる（図9）。

エリア	攻 撃	守 備
重要空間	1. シュートをする 2. 突破をする 3. 重要空間内の味方へパスをする 4. キープをする 5. ブレイクエリアへ展開する 6. サイドエリアへ展開する	1. ボールを奪う（ファウルをしない） 2. シュートを打たせない 3. シュートブロック 4. 重要空間から追い出す
ブレイク エ リ ア	1. シュートをする（コースがあれば） 2. 重要空間へ侵入する（突破、パスを含む） 3. サイドエリアへ展開する 4. 他のブレイクエリアへ展開する 5. ボールをキープをする 6. その他のエリアへの展開する	1. ボールを奪う（ファウルをしない） 2. 重要空間に侵入させない（突破、パスを含む） 3. サイドエリアへ展開させない 4. 違うブレイクエリアへ展開させない 5. 後ろへ下げさせる
サ イ ド エ リ ア	1. 重要空間へ侵入する（突破） 2. 重要空間へセンターリングする 3. ボールをキープをする 4. ブレイクエリアへ展開する 5. 相手に当ててコーナーキックを獲得する 6. 相手に当ててスローインを獲得する	1. ボールを奪う（ファウルをしない） 2. 重要空間に侵入させない（突破） 3. 重要空間へセンターリングをさせない 4. ブレイクエリアへ展開させない

図9 各エリアにおけるプレーの優先順位

2) サッカーのゲームにおける局面

筆者の考えるサッカーのゲームにおける局面を図10に示した。日本サッカー協会、金子、伊藤の理論に不足していた「ルース・ボール」の局面を明確に位置付けた。「ルース・ボール」とは、「いずれのチームの所有でもない状態のボール」である（櫻井, 1998, p.746）^{注4)}。また田中（1986）は「中立のボール」という名称を使い、「どちらのチームにも支配されていないボールは、サッカーの試合ではかなりたくさんある」とし、発生する局面の代表的な例として「競り合いのこぼれ球、コントロールミス・不正確なパス」を挙げている。また、「ルース・ボール」を支配することのメリットとして「ボールを保持したチームは、得点への可能性が開けてくる」とし、保持できなかったチームは「失点の恐怖に落とし入れられる」と述べている。また、技能レベルの低い試合ほど「中立のボールが多くなる」と述べている（田中, 1986, p.30）。

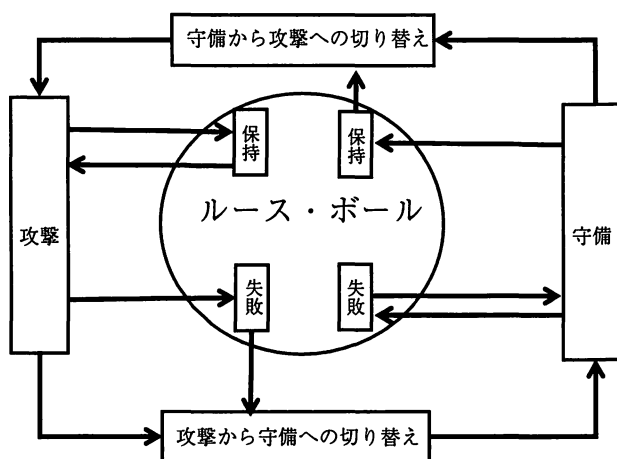


図10 サッカーのゲームにおける局面

次に各局面における内容について論述する。「攻撃」の局面とは、前述したフィールドの分類による各エリアの認識とそこにおける攻撃の優先順位を考えプレーする局面である。「ルース・ボール」の局面は、攻撃・守備のどちらの支配下にもない局面なので、ボールを保持した側が攻撃を実施できる局面である。「攻撃から守備」の局面は、ボールの喪失による攻撃から守備への準備であり、どのエリアが危険になるかを考える局面である。「守備」の局面は、各エリアの認識とそこにおける守備の優先順位を考えプレーする局面である。「守備から攻撃への切り替え」は、ボールの奪還による守備から攻撃への準備をし、自チームがどの攻撃のエリアに侵入するのかを考える局面である。これらの「攻撃から守備」「守備から攻撃」の局面において、攻守の切り替えを早く行うことにより、攻撃においては相手守備の隙をついた攻撃を実行でき、守備は隙をつくらないことができる。そのため、この局面において攻守の切り替えを早く行うことは「試合を有利に進めることができる」というメリットがある（横浜マリノス, 1999, p.39）。また、「ルース・ボール」をどちらのチームも保持できずライ

ンを割ってしまった場合は、「ルース・ボール」の保持・失敗と同様の局面の移行が生じる。

以上の様に、「ルース・ボール」局面を位置づけることにより、「ルース・ボール」を意図的に発生させるような攻撃や、発生させない守備を戦術として位置づけることが可能になると考える。意図的に「ルース・ボール」を発生させ攻撃を展開する例として、前線にターゲットとなる背の高い選手を配置し、ロングボールを放り込み、ターゲットとなる選手と相手守備者の競り合いにより発生したルース・ボールを周りの選手が拾い攻撃を展開する方法がある（松井, 2010, p.33）。このような攻撃に対して守備はフィールド内のルース・ボールにならないようにタッチラインを超えるクリアで逃れることがルース・ボールを発生させない守備の一例である。

3) サッカーの技術・戦術構造

図11に伊藤の理論を参考に筆者の考えるサッカーにおける技術・戦術構造を示した。伊藤の理論は「フリースペース」を中心に技術・戦術を相互関連の中で捉え構造化した。筆者は「重要空間をめぐる攻防」を中心に技術・戦術の構造化を試みる。

攻撃の「質的发展段階」を「個の力による攻撃」「場所へボールを送る攻撃」「2人によるコンビネーションを使った攻撃」「3人によるコンビネーションを使った攻撃」「他のプレーエリアへの移動を使った攻撃」の5段階を位置づけた。守備の「質的发展段階」については「個の力による守備」「2人によるコンビネーションを使った守備」「ポジションによるコンビネーションを使った守備」「場所を意識した守備」「コンビネーションと個人の力を融合した守備」の5段階を位置づけた。攻撃と守備の「質的发展段階」についてはそれぞれの相互作用により、「質的发展」が促されると捉えた^{注5)}。また、各「質的发展段階」に「集団戦術」「個別技術」を位置づけ、攻防の「質的发展段階」に応じてこれらも質的发展をするものと捉えた。

「個の力による攻撃」では主に「ドリブル」を用いて「重要空間」に侵入しシュートすることを目指す段階である。「集団戦術」には、「ドリブル突破」を位置づける。「ドリブル突破」とは、選手個人のドリブルにより相手守備を破ることであるが、周りの味方の選手もこぼれ球やドリブルをミスしたボールを拾うための準備をしていると捉え、「集団戦術」に位置づける。「個別技術」には「ドリブル」「キック」「フォロー」を位置づける。「ドリブル」については、相手守備者を「突破」するために用いられ、「キック」に関しては、主に「シュート」を目的とする。「フォロー」とは「パス」を受けるための動きではなく、こぼれ球や味方・相手のミスしたボールを獲得するための動きである^{注6)}。「個の力による攻撃」を最初の段階として位置づけた理由は、サッカーは「1対1の勝負」が基本であると考えからである（横浜マリノス, 1999, p.44）。また、「集団戦術」に「ド

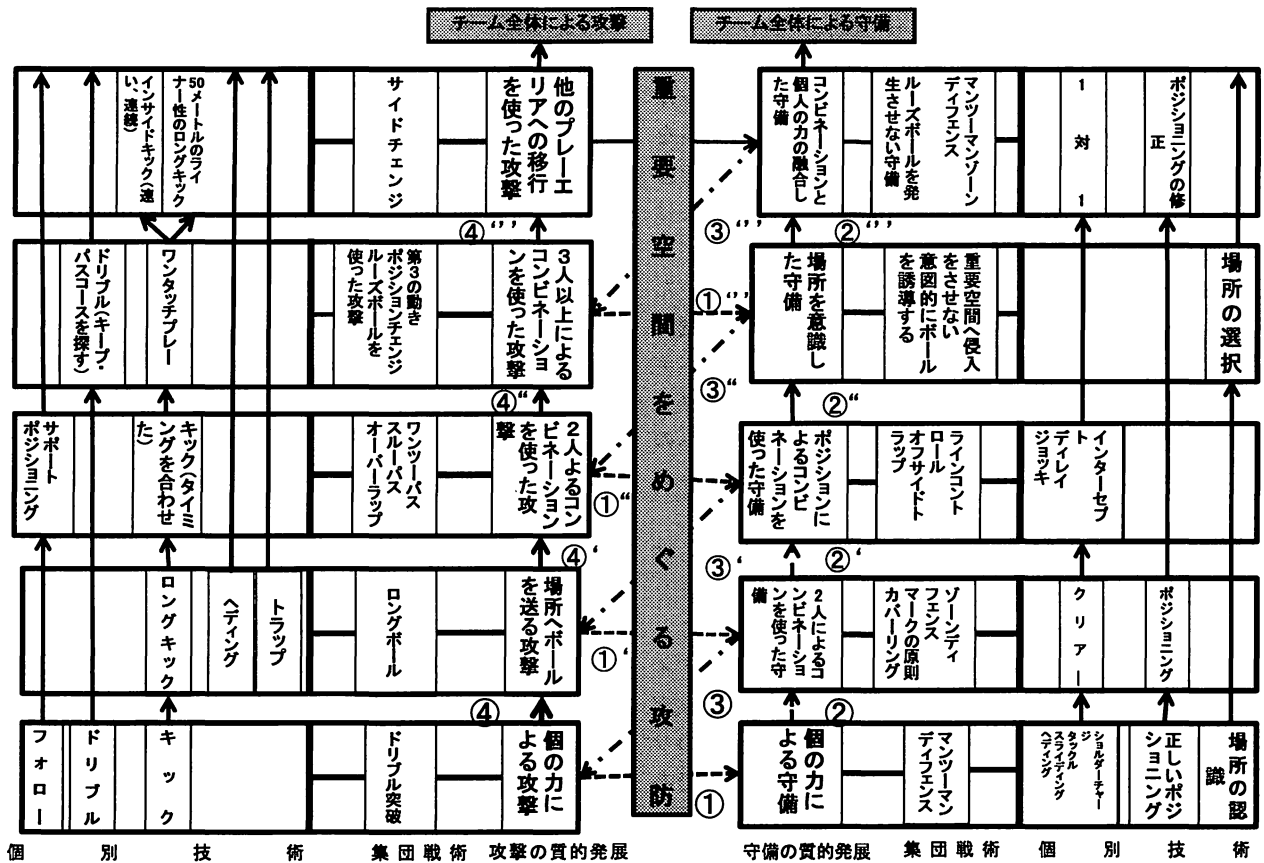


図11 サッカーの技術・戦術構造

※図中矢印は以下の内容を意味する

- ①攻撃から守備への働きかけ ②守備の質的发展 ③守備の質的发展による攻撃への働きかけ ④攻撃の質的发展.以下、①' ②' ③'''に対応

「ドリブル突破」を位置づける理由は個人技能が未熟な段階においてパスを多用する攻撃ではミスが多く相手にボールを奪われてしまう。そこで、個人技能の水準が低い場合は「ドリブル戦法」が適している（多和，1974，p.96）という指摘を参考に位置づけた。

このような攻撃に対し、守備は「個の力による守備」を展開する（図中矢印①）。ここでは主に「1対1」で守りボールを奪うことが行われている。この段階での「集団戦術」は、「マンツーマンディフェンス」を位置づける。「マンツーマンディフェンス」とは、「相手の攻撃選手1人に対して、味方の守備選手が1人マークにつくという戦術」である（田嶋，2002，p.137）。「個別技術」に関しては、「正しいポジショニング」「ショルダーチャージ」「タックル」「スライディング」「場所の認識」を位置づけた。「正しいポジショニング」^{注7)}とは、「ゴールとボールを結んだライン上にポジショニングをとる」「間合いをつめる」ことである（日本サッカー協会，2007，pp. 22-23）。「場所の認識」とは、図7に示した各エリアの特性について認識することである。

次に、攻撃側の「ドリブル」の技術的な向上により個人の力だけでは相手の攻撃を防ぐことができなくなる。そこで、守備は「2人によるコンビネーションを使った守備」の段階に発展する（図中矢印②）。ここでは、「ゾーンディフェンス」「マークの原則」「カバーリング」が

新たに「集団戦術」として加わる。「ゾーンディフェンス」とは、ピッチ上にいる全ての選手がそれぞれ自分の守るべき地域を持つ守備を展開することである（田嶋，2002，p.135）。「マークの原則」とは、「ゴールと相手を結んだ線上に立つ」「ボールと相手が同時に見える位置に立つ」「相手にボールがわたる瞬間にインターセプトができ、かつ相手に自分の背後へ走りこまれ、パスを通されることがない位置をとる」ことである（山中，1980，p.28）。「カバーリング」とは、「味方の守備者が攻撃者に突破されたときに、他の守備者がすぐに守りにいくこと」である（日本サッカー協会，2007，p.98）。それらに必要な「個別技術」として、「ポジショニング」「クリア」を位置づけた。この段階の「ポジショニング」とは、相手攻撃者との1対1にも対応でき味方守備者の「カバーリング」ができる位置とする。「クリア」とは、「守備側が危険地帯からボールをなるべく遠い場所に蹴りだして、いったんピンチから逃れること」である（田嶋，2002，p.115）。

このように強化された守備に対して「ドリブル突破」だけでは相手守備を崩すことが困難となってくる（図中矢印③）。そこで攻撃の「質的发展」が促され「場所へボールを送る攻撃」を展開する段階を位置づける（図中矢印④）。ここでは、味方の選手を意図的に狙うのではなく前方の空いた「場所」へボールを送り、そこに味方

選手が走りこみボールを奪い、「重要空間」へ侵入しシュートを目指す段階である。「場所へボールを送る攻撃」については、味方選手のキック精度の低いロングボールにフォワードが相手と競り合いボールを保持しゴールを狙うというキックアンドラッシュ戦法の初期の段階を参考とし位置づけた(多和, 1974, p.98)。「集団戦術」は「ロングボール」を位置づける。ここでの「ロングボール」は、人へ合わせる「パス」ではなく前方の空いた「場所(スペース)」へボールを送ることである。「個別技術」に関しては、「ロングキック」「トラップ」「ヘディング」を位置づける。この段階での「ロングキック」とは、相手ディフェンスラインの背後のスペースへの「ロングボール」やサイドから「重要空間」へのセンターリングである。

このような相手攻撃の発展により守備側は更なる技術・戦術の発展を迫られ(図中矢印①‘),「ポジションによるコンビネーションを使った守備」を展開することになる(図中矢印②‘)。「集団戦術」には「ラインディフェンス」「オフサイドトラップ」が加わる。「ラインディフェンス」とは、「数人のDFが横一列に並び、そのラインをみんなで呼吸を合わせて上下に動かす」ことである(水沼, 2003, p.181)。「オフサイドトラップ」とは、相手攻撃者を意図的にオフサイドにすることである。「個別技術」には「インターセプト」「ディレイ」「ジョッキー」の3つを位置づける。「インターセプト」とは、相手攻撃者の「パス」を自分のマークが触る前に奪うことである。「ディレイ」とは、「少しでも攻撃を遅らせようとするプレー」である(田嶋, 2002, p.117)。「ラインディフェンス」は「相手FWと駆け引きをして、時にはオフサイドトラップをかけ、相手を混乱させる」機能があることから「オフサイドトラップ」を実行するために不可欠な要素であると考え(水沼, 2003, p.181)。

このように次第に組織された守備(図中矢印③‘)を突破するために攻撃は「2人によるコンビネーションを使った攻撃」を展開する段階へと発展する(図中矢印④‘)。ここでは、主に2人による「パス交換」を使い相手守備を突破し「重要空間」からシュートすることを目指す。「集団戦術」については、「オーバーラップ」「スルーパス」「ワン・ツーパス」を新たに位置づける。この集団戦術の実行には、パスの受け手の「タイミング」とパスを出す側の「タイミング」の一致が求められる(田嶋, 2002, p.99, p.111; 長谷川, 2005, p.176)。「個別技術」には「サポート」「ポジショニング」を位置づける。「サポート」とは、「ボールを保持している味方選手のために、パスコースをつくるような動きをすること」であり(日本サッカー協会, 2007, p.99),ここでの「ポジショニング」とは、「サポート」をする「場所」をどこに取るかということである。また、「パス」に関しては走る人の「タイミング」「場所」を合わせた「キック」が必要となる。

このような、攻撃の発展(図中矢印①‘)により守備は「場所を意識した守備」を展開する必要に迫られる(図中矢印②‘)。「場所を意識した守備」とは、守備に参加する選手が前後左右に存在しそれぞれが「場所」について理解し守備をしている状態である。「集団戦術」として「重要空間へ侵入をさせない」「意図的にボールを誘導する」が加わる。「重要空間へ侵入をさせない」は、図7に示した「重要空間」への侵入を防ぎ、それを防御する方法である。「意図的にボールを誘導する」は、図7に示したサッカーコートの中の「場所」でボールを奪うかを決めておき相手の攻撃をその決めておいた「場所」へ誘導してボールを奪うということである^{注8)}。そこで必要となるのが、「個別技術」に位置づけている「場所の選択」である。「場所の選択」とは、「場所」の特性を考慮し選択していくことである。

このように相手の守備の向上によりスペースの減少やプレッシャーが強くなっていくことにより、なかなか攻撃が成功しなくなってくる(図中矢印③‘)。そこで攻撃は「3人によるコンビネーションを使った攻撃」を展開する段階へ移る(図中矢印④‘)。ここでは、3人によるコンビネーションを用いて相手守備を突破し「重要空間」からのシュートを目指す段階である。「集団戦術」には、「ポジションチェンジ」「第3の動き」「ルース・ボールを使った攻撃」を位置づけている。この「ポジションチェンジ」「第3の動き」を成立させるためには、スペースを創るプレーヤーとパスを出すプレーヤーとスペースに走りこみパスを受けるプレーヤーの3人の「タイミング」「場所」が合わなければ成功しない。また、パスの数も1本から2本へ増加することによりプレーの数が増えミスする可能性も上がる。このように、この段階の戦術は動きが複雑になるため、前段階の戦術よりも高い技術の精度が求められる。「ルース・ボールを使った攻撃」とは、攻撃において意図的に「ルース・ボール」を発生させる攻撃を展開することや、攻撃時においても「ルース・ボール」を相手よりも先に保持するポジショニングや意識を持ち攻撃を展開することを意味する。

「個別技術」に関しては「ワンタッチプレー」「ドリブル」を位置付けた。「ワンタッチプレー」とは、「ボールを止めることなしに、ファーストタッチでパス、シュートなどをすること」である(日本サッカー協会, 2007, p.100)。これにより、コンビネーションプレーのスピードを上げ、守備者にマークされている状況でもコンビネーションプレーを成功させるために必要となってくる。「ドリブル」に関しては、「突破」以外に「キープ」「パスコースを探す」の2つを加える。

このようにコンビネーションが複数の人数により展開され、技術も発展している状態の攻撃を「場所を意識した守備」をしても守りきれない場合(図中矢印①‘)には「コンビネーションと個人の力を融合した守備」の段階へと発展する(図中矢印②‘)。ここでは、チーム全

員がディフェンスの方法の変化と個人の力を用いて守備を展開する。「集団戦術」には「マンツーマンゾーンディフェンス」と「ルース・ボールを発生させない守備」を位置づける。「マンツーマンゾーンディフェンス」とは、「マンツーマンを主体にしてゾーンを加味したチェンジングディフェンス」である(多和, 1974, p.118)。「ルース・ボールを発生させない守備」とは、相手との競り合いによるこぼれ球や中途半端なクリアによる「ルース・ボール」をフィールド内に発生させない守備であり、発生した場合には攻撃者側にボールが渡らないようにすることである。「個別技術」には「ポジショニングの修正」「1対1」を位置づけている。「ポジショニングの修正」とは、前述した「ポジショニング」に「ルース・ボールに対応」するポジショニングが加味したものである。「1対1」とは、相手の強化された攻撃に対しても「マンツーマンディフェンス」で守れる技術や戦術的な理解を持ち、守備を展開する技術である。ここでは、更なるディフェンスの強化には個人の力の強化が必要となるため位置づけた。

このように発展を遂げた守備の組織(図中矢印③“)を崩すために攻撃は「他のプレーエリアへの移行を使った攻撃」を展開する(図中矢印④“)”。ここでは、相手ディフェンスを左右に揺さぶりそこで生じた守備の組織の隙をつき攻撃を展開し「重要空間」からシュートを目指す方法である。ここで用いられる「集団戦術」には「サイドチェンジ」を位置づけている。「サイドチェンジ」とはロングボール等を用いて自分たちが攻撃を展開している「場所」を変えることである。この「サイドチェンジ」戦術には、一本のロングボールにより行う方法と、味方選手と素早いパス交換の連続により行う方法の2つがある(前田, 2003, p.102)。そのため「個別技術」は「50メートルのライナー性のロングキック」と「インサイドキック(速い, 連続)」を位置づけている。「50メートルのライナー性のロングキック」とは、サイドチェンジをする際に必要な「ロングパス」が1本でできる技術である。「インサイドキック(速い, 連続)」とは、ボールスピードの速いインサイドパスを味方選手間で素早くつなぎサイドチェンジを行う技術である。

このように攻撃・守備が発展すると「チーム全体による攻撃」「チーム全体による守備」を展開する段階になる。「チーム全体による攻撃」に関しては「集団戦術の連動性」向上と「集団戦術の併用」が必要となる。例えば、意図的に相手守備陣を右サイドに寄せるためにパスをつなぎ、相手守備陣が右サイドに寄ってきたならば、左サイドへボールを送る。このとき、ボールを受けるプレーヤーの周りのプレーヤーは即座に前述した攻撃の「集団戦術」の実行をする。この、周りが行う「集団戦術」はこれまでに述べてきた「集団戦術」を併用し相手守備陣に的を絞らせず攻撃することである。もし、「ルース・ボール」が発生した時のために周りのプレーヤーは、「ルース・ボール」を自チームが保持できるような

準備も行わなければならない。このように、プレーヤーの人数や意識する事柄、プレーのタイミングが多くありチーム全体のプレーヤーにそれぞれ役割のある状態が、「チーム全体による攻撃」である。

守備に関しては「重要空間」へ侵入しようと攻撃を展開する相手の攻撃をフィールド内にいる全ての選手が守備を組織し守備における技術・戦術を実行している段階である。この段階においては、守備における全ての技術・戦術を使い守備をすることを位置づける。また、「ルース・ボール」に関しても自チームが保持することができるようポジショニングや意識が求められる。このようにチーム全体のプレーヤーにそれぞれ守備における役割のある状態が「チーム全体による守備」である。

以上のように現代サッカーにおいては、技術・戦術構造の最高段階である「チーム全体による攻撃」(全員攻撃)、「チーム全体による守備」(全員守備)が行われている(山中, 1980, pp.104-105; 望月, 2010, p.151)。

以上のように、筆者は「重要空間をめぐる攻防」を中心に攻撃、守備の「質的发展段階」を位置づけ、攻撃、守備の相互作用により「質的发展段階」が発展すると捉えた。また、それぞれの段階に対応する「集団戦術」「個別技術」を位置づけ、攻撃、守備の「質的发展段階」が変化することにより「集団戦術」「個別技術」が質的发展をするものとし、サッカーの技術・戦術を構造化した。

ま と め

本論ではサッカーの技術・戦術構造についての先行研究(日本サッカー協会の理論, 金子憲一の理論, 伊藤烈の理論)の評価点と改善点を①サッカーの「ゲームにおける局面」をどのように捉えているか, ②「技術・戦術の構造」をどのように捉えているかの2点について検討した。その検討を踏まえ、サッカーのフィールドを「重要空間」「サイドエリア」「ブレイクエリア」の3つに分類し、各エリアにおけるプレーの優先順位を明確にした。また、「ルース・ボール」を取り入れたサッカーのゲームにおける局面について提起し、「重要空間をめぐる攻防」を中核に据えた筆者独自の技術・戦術構造を提起した。

今後の課題としては、この技術・戦術構造に基づき対象者の応じた指導理論を展開することが挙げられる。

注

注1) 遠藤(2007), 松木(2003), 水沼(2003), チャールズ・ヒューズ(1996)らの指導書は、技術・戦術についての詳細な記述はあるが、選手の技能やチームの特性に応じて、何をどのような順序で指導していくかについては記述されていない。

注2) 技術的特質とは学校体育研究同志会が規定した概

念であり「それぞれの運動文化が持っている『面白さや持ち味』ということ」であり、「他の種目（教材）にないその種目独自の技術的な特性（本質）である」（荒木, 1974, p.53）。

注3）広辞苑によると「エリア」は「地域」と定義され（新村, 1994, p.293）, 「ゾーン」に関しては「地帯」と定義されている（新村, 1994, p.1501）. 「地帯」とは「ある程度の広がりを持つ地域」と定義され（新村, 1994, p.1649）, 「地域」は「区切られた土地」「土地の区域」と定義されている（新村, 1994, p.1638）. このように, 「ゾーン」は「エリア」よりも広い範囲であることが理解できる. そのため, 本論において示した「重要空間」「サイドエリア」「ブレイクエリア」に関しては「エリア」を使うこととする.

注4）「ルース・ボール」については, 「日本ではなまってルーズ・ボールと発音されることが多い」とされている（湯村, 鈴木, 1985, p.283）.

注5）久世は「球技における諸種目の戦術を最初に特質付けるのが, 攻撃側の得点行動に対する反撃行動である. その後攻撃戦術は防御戦術が反撃行動へ移行することによって, 必然的に質的發展を引き起こす. さらに攻撃戦術の発展が防御戦術の発展を促す」と述べている（久世, 1998）. 本論でもこの論述に依拠する.

注6）フォローという用語はサポートと同義で用いられていることがあるが, 本論では「はねかえってくるボールを捕えること」（湯村, 鈴木, 1985, p.171）という意味を参考に「パス」を受けるための動きではなく, こぼれ球や味方・相手のミスしたボールを獲得するための動きとする.

注7）「ポジショニング」とは「試合中競技者が, コートなどの状態, 相手の位置及びボールなどの来る方向を考えなければならない適切な位置」という定義を参考にした（湯村, 鈴木, 1985, p.366）.

注8）岩本（2008）は, 2006年ドイツワールドカップの64試合を対象にディフェンスプレイヤーのプレー傾向を分析している. その結果, ドイツ大会において上位に進出したチームでは, 両サイドのスペースに追い込みパスを出させていた. また, 「オフenseプレイヤーをサイドに追い込みボールを奪取することが, 失点減少に結び付く重要な要因であることが示唆された」としている. このことから, 「場所へ誘導する守備」は世界レベルの大会もしくは国内トップレベルのチームでは行われている戦術であると考ええる.

参考文献

荒木豊（1974）体育実践論. 学校体育研究同志会編, ベースボールマガジン社：東京.

荒木豊（2004）バスケットボールにおける「2対0」理論について. 学校体育研究同志会創立50周年記念誌編集委員会編, 体育実践とヒューマンズム. 創文企画：東京.

チャールズ・ヒューズ：辻浅夫・京極昌三訳（1996）サッカー勝利への技術・戦術. 大修館書店：東京.

遠藤雅大（2007）実践的ジュニアサッカー. スキージャーナル株式会社：東京.

ギュンター・シュティラー：金子明友, 稲垣安二訳（1980）球技戦術論. 新体育, 50：60-68.

H.デーブラー：稲垣安二・上平雅史監訳, 谷釜了正訳（1985）球技運動学. 不昧堂出版：東京.

長谷川健太（2005）うまくなるサッカー. 西東社：東京.

長谷川裕（1990）体育教育におけるスポーツ戦略・戦術の指導. 体育科教育, 大修館書店：東京.

井芹武二郎（1991）平泳ぎの指導について. 北海道大学教育学部紀要, 55：187-205.

井芹武二郎（2003）テニスの初心者指導について. 北海道大学大学院教育学研究科紀要, 89：1-30.

伊藤烈（2005）サッカーにおける初心者を対象とした指導理論について. 北海道浅井学園大学大学院生涯学習研究科修士論文.

岩本哲也・吉田久士（2008）サッカーにおけるディフェンスプレイヤーの判断基準の検討-ディフェンシブゾーンへのパスに注目して-. 国土館大学体育・スポーツ科学学会, 体育・スポーツ科学研究, 8：23-27.

Jリーグ公式サイト：2005 OPTA, <http://www.j-league.or.jp/2005opta/>.

Jリーグ公式サイト：2006 OPTA, <http://www.j-league.or.jp/2006opta/>.

金子憲一（2010）スペインサッカーの育成方法から学ぶ日本の現状と課題. 日本ストレグス&コンディショニング協会機関紙, 8/9月号, 2-11.

越山賢一・吉村雅文・古賀初（2004）「ジャンピングのヘディング」の指導に関する事例研究. 北海道教育大学紀要, 教育科学編, 54(2)：145-152.

松井大輔（2010）独破力. 株式会社PHP研究所：東京.

松木安太郎監修（2003）サッカーの戦術. 新星出版社：東京.

望月聡（2011）2010ワールドカップ南アフリカを楽しむ方法. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 8：151-152.

新村出編（1994）広辞苑. 岩波書店：東京.

クルト・マイネル：金子明友訳（1981）スポーツ運動学. 大修館書店：東京.

久世たかお（1998）ラグビー・フットボールの指導について. 北海道大学教育学部紀要, 75：253-277.

前田秀樹（2003）サッカーの戦術&技術. 新星出版社：東京.

- 水沼貴史（2003）サッカー攻めのスーパーテクニック。
実業之日本社：東京。
- 日本サッカー協会（2007）サッカーの指導教本。財団法人日本サッカー協会・技術委員会：東京。
- 櫻井榮七郎編（1998）球技用語事典。風味堂：東京。
- 佐藤亮平・竹田唯史（2010）サッカーの戦術と現代サッカーの戦術。コーチング学研究, 24(2):225-228。
- 進藤省次郎（1988）とび箱運動における技術指導体系に関する研究(1)。北海道大学教育学部紀要, 51:51-87。
- 進藤省次郎（2003）バレーボールの初心者に対するパスの技術指導。北海道大学大学院教育学研究科紀要, 89:53-72。
- 田嶋幸三（2002）ワールドカップのスーパープレーでうまくなる！サッカー。ポプラ社：東京。
- 高村泰雄（1987）物理教授法の研究-授業諸方式による学習指導方の改善-。北海道大学図書刊行会：札幌。
- 瀧井敏郎（1990）用語解説 戦略・戦術・作戦。学校体育, 6月号, 79。
- 竹田唯史（2010）スキー運動における技術指導に関する研究-初心者から上級者までの教授プログラム-。共同文化社：札幌。
- 田中和久（1986）サッカーの戦術。風味堂：東京。
- 多和健雄（1974）サッカーのコーチング。大修館書店：東京。
- 吉田文久（1991）球技における戦略・戦術論。運動文化研究, 学校体育研究同志会, 9:42-49。
- 山中邦夫（1980）コーチ学（コンビネーションサッカー編）。新体育学講座第77巻, 逍遙書院：東京。
- 横浜マリノス編著。サッカー戦術編。池田書店：東京。
- 湯村久治, 鈴木富生編著（1985）最新スポーツ大辞典。国書刊行会：東京。

〔平成23年3月31日 受付〕
〔平成23年7月28日 受理〕